

# 文芸研ニュース

2021年5月4日

—NO. 157—

発行 文芸教育研究協議会  
編集 文芸研事務局

## 文芸教育全国研究大会は

### 2021年・第55回

第一報

オンラインで  
開催します！

主催

文芸教育研究協議会(文芸研)

期日

8月1日(日)9時～17時

内容・日程

テーマ ものの見方・考え方を育てる

国語教育―美と真実を求めて―

目次

巻頭 上西委員長より	1
各地からの報告	6
事務局通信	21

## 2. 9時開始

- ①参加者の皆さんへ  
②バーシック文芸研

(山中吾郎全国委員)

- ③入門講座(①詩 ②作文 ③文芸学  
④ものの見方・考え方)から一入門  
講座を選択

13時～

- ④分科会A+(⑤1年「くじらぐも」  
⑥3年「モチモチの木」 ⑦5年  
「大造じいさんとガン」 ⑧説明文  
「ありの行列」他)から一分科会を  
選択

17時終了

- ⑤分科会B(⑨2年「スーホの白い馬」  
⑩4年「ごんぎつね」 ⑪6年「海の  
命」⑫中学「少年の日の思い出」か  
ら一分科会を選択

## 参加費

①1000円 ②2500円(「文芸教育」誌

最新号代金1500円を含む。送料サービス)申し込  
みは peatix(ピーティックス)を通して(申し込  
み・入金が確認出来次第レポートをデータで送信し  
ます ②書籍購入の方にはレポート・データ送信と  
「文芸教育」誌を郵送します)

## 問合せ

大会事務局代表：山中尊生

(携帯) 090-4760-3810

メールアドレス imokonoko54@gmail.com)

詳しくは文芸研HPに5月上旬に掲載予定の「大会要項」をご覧ください。

(<http://www5.synapse.ne.jp/heart/> か「文芸研」で検索)

## 初めてのオンライン全国大会の

## 成功をめざして

上西信夫(文芸研委員長)

三度目の緊急事態宣言が発出された四月末。実践研をどうするか悩んでいた昨年の五月初めと全く変わらない状況どころか、ワクチン接種の遅れ、変異株の拡大で事態は深刻化しています。コロナ対応でハードな労働状況の上に、大阪市では対面とオンライン授業の併用と現場の負担がますます大きくなるのは目に見えています。「#教師のバトン」等に現場の声を上げていきましょう。

コロナ禍であっても運動を停滞させるわけにはいけない

ので、この間、感染がそれほど広がっていない地域は対面式の学習会を、枚方・松戸・阿南・唐津のオンラインによる学習会や山口東・東京の対面式とオンライン併用の学習会の実施等がHPに掲載されました。オンライン全国大会のあり方を検討するプロジェクトチームを立ち上げ、山中尊生・松山幸路・倉富寿史・山中吾郎・西真由子・酒井大輔さんらが原案を作成し、オンラインによる実践研や全国委員会・代表者会議を積み重ねて大会の持ち方を議論してきました。そこでの合意として第五回大会は初のオンライン大会と決定しました。横浜市の神奈川学園精華小学校をお借りし大会本部とし運営していきます。内容・日程は上記の通りです。(HPに掲載)

オンライン大会は、二日間かけていた従来の大会とは、同じというわけにはいきません。分科会・入門講座も討議も含めて二時間弱で報告せざるをえません。レポートは司会者と共に事前にリハーサルを兼ねて地域でプレ集会の位置づけでオンラインによる学習会の経験を積んでください。(山口東サークルは四月に実施)

従来の対面式大会と同様に、各地でオンライン大会参加を呼びかけ、参加者を増やしていきましょう。旅費等の費用がかかる従来型の全国大会に比べればハードルが低く声をかけやすいと思います。「大会要項」も五月八日春の実践研までにはデータを各サークルに配信できるように準備を進めています。

# 再び日本学術会議任命拒否問題について

四月二二日、日本学術会議は総会で六人の即時任命を要求する「声明」を出しました。(昨年は「要望書」昨年九月末にクーデター的手法で従来の法解釈を反故にし、半年経った現在に至るまで任命拒否の説明が行われない不誠実で強権的な対応が続いています。菅首相の任命拒否は学問の自由の侵害そのもので、八〇〇以上の学会、二〇〇団体が抗議声明を出しています。文芸研も一〇月六日に全国委員会名で抗議・撤回声明を出したのは周知のことと思います。(HPに掲載)一〇〇〇を超える学協会が一斉に抗議声明を出すことは歴史上初めてのことです。)

(『私たちは学術会議の任命拒否問題に抗議する』人文社会科学系学協会連合連絡会編・論創社に詳しい)「ネイチャー」や「サイエンス」誌は、日本の学術会議任命拒否問題をトランプをはじめとする為政者による科学の軽視・無視と同根で危険な兆候と警鐘を鳴らしています。言論の自由度・ジェンダーギャップ国際比率と共に、任命拒否問題は日本の国際的信用を失墜させるものとなっています。

この問題から菅政権は、政治主導の意味をはき違え、不当な政治介入を繰り返してきた安倍政権のやり方を継承していることが衆目の下に明らかになりました。金子兜太氏揮毫の「安倍政治を許さない!」は有名でしたが、「安倍政治」とは、二〇一三年以来権力維持のためには、権力暴走のブレーキとなる法的仕組みをことごとく破壊してきたことを指します。

① 中央省庁人事の官邸支配 ② 内閣法制局の破壊  
③ モリカケサクラでの公文書管理破壊 ④ 辺野古埋め立て(・直近の福島の汚染水海上放出の)地方自治破壊 ⑤ 検察官人事支配による政権犯罪取り締まりの排除、その他にも公共放送・政府委員会・有識者会議・外郭団体に対する人事権を掌握すること、政権への異論を抑え込んできました。その結果流行語大賞にも選ばれた「忖度」することが横行しました。その政権の中心にいたのが菅義偉官房長官(当時)と公安出身の杉田和博官房副長官です。違法で恣意的な政治権力の介入の暴走が ⑥ 学術会議人事への介入として露わになりました。

国会での菅首相の答弁は混迷を極めました。拒否理由としてあげた「総合的・俯瞰的に勘案」から始まり憲法一五条を任命拒否の根拠にすることも、二三条「学問の自由」の解釈についても学問や憲法に対する無知蒙昧ぶりをさらけ出しています。そうで

なければ確信犯としての独裁者・暴君を気取っているのかどちらかです。鹿児島大会に登壇いただいた木村草太氏（憲法学・東京都立大教授）は、解答拒否自体も違法であるが、この間の菅政権の対応は憲法違反であり、日本学術会議法違反であり、行政手続法違反であると指摘しています。

第二次安倍政権からのこの八年間、疑惑や問題に真正面から答えず、時が過ぎるのを待ち、そのため国会をできるだけ開かず、国民を忘却や諦めの境地に至らせことに専念してきた彼らの戦術に屈するわけにはいきません。また、公言できない政治的意図——「戦争目的とする科学の研究は絶対にこれを行わない」と三度（一九四九・一九六二・二〇一七年）も誓言してきた学術会議は、特定秘密保護法（二〇一三年）・安保関連法（二〇一五年）・共謀罪法（二〇一七年）と「戦争のできる国」をめざす政権にとつてはこれらに反対の立場を表明してきた学者・研究者は目障りな存在であり、拒否された六名は政権の方針に従わない官僚の更迭と同様に見せしめ的に——誰がボスカとマウティングしてきたといえるでしょう。

菅首相は、憲法一五条（公務員を選定し、及びこれを罷免することは、国民固有の権利である。）を根拠に正当化しますが、一五条は参政権を国民に保障

した条文であり、どう考えても内閣に権限を与えたものではありません。今回の任命拒否のように首相に無限定の人事権があるとするならば、公金を使っているという理由で大学の自治——人事・研究に介入することに道を開くことになります。政治から独立性を要求される公務員の人事（裁判官・検察官・公取委）や、芸術文化・スポーツ補助金行政の配分にも影響を与えることは必至です。

菅首相は、研究者個人の研究の自由や発表は保障されているので「学問の自由」（二三条）とは関係がないとも言います。学問の自由は、思想・表現の自由の一部ではありますが、その本質は政治権力からの学問の自由と独立性にあります。個人的自由ではなく、学問そのものの自由であり真理を追究する学問共同体の自律性を意味しています。滝川事件や天皇機関説弾圧の例を出すまでもなく、政治的権力や社会的な圧力から学問領域を守ることが二三条の趣旨です。先の戦争遂行に手を貸した歴史の反省から、学術会議は先の誓言を繰り返し、学者は真理と論理の追求において妥協してはならないことを標榜してきたのです。

根拠と理由をあげての議論が民主主義の条件です。しかし、この間の政権の対応や今回の「声明」に対しても「解決済み」と木で鼻を括ったような加藤勝

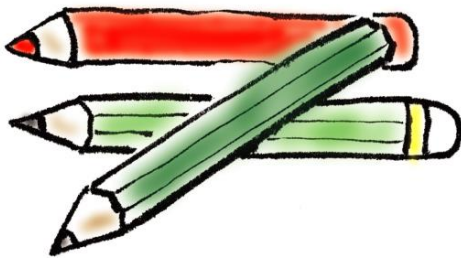
信官房長官談話からは、専門知へのリスpekトの欠片さえ感じることができません。この姿勢は安保法制のころから顕著で、コロナ対策でも専門家の意見の軽視は続いています。政権与党は、法律論的にも制度論的にも破綻しているのにもかかわらず、任命拒否問題を学術会議のあり方―組織論にすり替えて批判をかわそうとしています。行政改革の観点から政府機関から民間移行へという案です。

今回の新型コロナウイルス感染症のような複雑かつ地球規模のパンデミック（大流行）に対する適切な提言を行うには、多くの科学的分野の英知と協力が不可欠です。後手後手の対応と批判される政府に必要なのは科学的エビデンス（根拠）を中立・公正に国民に提供する学術会議の存在が 필요한のです。政府のチェック機構として政府機関であることは意味あることです。当初、一〇億という税金を食い物にしているとか（実際は交通費支給ぐらいでほぼボランティア）、年金をもらえとか、とんでもないフエイクが垂れ流されていました。一〇億円はアベノマスク二〇〇億円に比べると安い安全保障費です。

「学問の自由」が憲法に書き込まれている国は、第二次大戦の敗戦国やかつての全体主義国家だと知りました。学術会議潰しの策動を許すことは、「戦争目的とする科学の研究は絶対にこれを行わない」と

した設立趣旨を無にすることであり、戦争への道を再び開くこととなります。「戦争が廊下の奥に立ってゐた」は、京大俳句事件の渡辺白泉の句ですが、任命拒否問題を看過することは、「廊下」どころか「居間」に戦争を案内することと同じです。

※『学問の自由が危ない』（佐藤学・内田樹・上野千鶴子編／晶文社）を参照した。一読をお勧めする。



## 各サークルからの近況報告

### 今、求められるもの

東京サークル 小松小百合

コロナに始まり、コロナに終わった二〇二〇年度が終わろうとしています。緊急事態宣言を受け、実質三か月の休校状態が続き、教育現場ではかつてないさまざまな出来事が起きました。

そんな中、私の勤務校（東京都八王子市）では二学期以降、変形させながらも、修学旅行・体育大会・合唱コンクール・卒業式とおおよその行事を実施することができ、卒業生は自分達を支え励ましてくれた周囲の皆様に感謝の中、巣立っていききました。

わが市で、教育委員会から指示されたことは「校長判断」という決定事項でした。感染症対策という共通な決まりごとはあるものの、例えば修学旅行の実施の有無（含む実施時期をずらしての実施）は学校ごとに任されました。コロナ感染者及び濃厚接触者が出た場合は延期または中止、公共交通機関を避けてできるだけ貸し切りバスなどを使い密にならないように（その際のバス代は市が負担）などの制約はありましたが、現場の意見を聞きながら、実施の

方向に管理職と市教委が努力をしていただいたのは事実でした。同じ歩調で歩み始めた隣の中学校は感染者が出て修学旅行二週間前で延期となったそうですし、いわゆる修学旅行列車と言われる修学旅行生貸し切りの新幹線も乗車していたのはわが市の中学校二校だけで他の東京都内の中学校はことごとくキャンセルという状態でした。

奈良も京都もほとんど観光客のいない、外国からの旅行者のいない状況でした。市からの宣伝ということで宿には舞妓さんが待っていてくれました。生徒たちは計画通り班行動を行い、マスク・消毒という約束を守り、全員無事で三日間を過ごすことができました。

しかし、考えてみれば、わが校でできたことが「校長判断」ということでできなかった学校が多かったわけで、自分達が実施できたことを喜んでいることだけでいいのだろうかと思問が残ります。正直、現場はひどく迷いました。実施の前に再度参加希望調査をとったところ、祖父母などと同居している生徒、コロナが怖いから参加したくないという生徒もいました（もちろん、全額返金になりました）。「校長判断」という言葉は聞こえがいいけれど、本当に学校現場に任せるべきことなのかと思問は今でも残っています。卒業式の前に教育委員会の代表の先

生が来校し、「君たちはほとんどの行事をやりきった稀有な存在です」と褒めて(?)祝辞を言ってくれましたが。マスクをして歌う合唱コンクール、三年生の保護者しか見学できない体育大会。感染症対策として仕方がないのかと思いつながらも、現場が大切に行っている生徒の学びの場を保証できたのかという不安が残ります。当たり前にできていたことがどれだけ貴重で意味のあるものだったか突き付けられた一年間だったと思います。逆に価値のない・意味のないことは切り捨てても何ら支障がないこともわかりました。例えば、多くの管内研修。卒業式の教育委員会祝辞……。ましてや実施できず、さまざまな企画を立て生徒達と歩まれた他の中学校のみなさまのことを思うとどんなに大変なことだったのだろうと頭が下がります。勿論、実施できた学校の生徒の学びとできなかった生徒の学びに上下あるわけでもありません。できなかった学校では様々な知恵を駆使してそれに代わる行事を立ち上げ、生徒と作り上げてきた実践も紹介されています。「艱難(かんなん)汝を玉とす」という言葉を「学校だより」に載せていた校長先生もいらっしやいました。現場の私達はこの一年の経験語りながら、検証する時期を迎えていると思います。

さて、話は変わります。文芸研の私達もそんな中、かつてない取り組みで文芸研の学びを続けてきました。八王子では二か月ほど会場使用ができなくなったものの、再開後は月に一度の例会を続けてきました。早いもので上西先生のお力に頼りながらも、この三月で

五十二回となります。小学校の教材を中心に、参加者の希望を伺いながら続けてきた実践です。この頃は、学校単位で誘い合わせて参加してくださる学校もあり、リピーターが増えつつあります。一昨年、まだサークル員となってくださっていない先生の中から四人の方が鹿児島全国大会へ参加してくださいました。今年になってからは、上西先生と私を入れてこのコロナ禍で制約が多い中、十人前後の先生方の参加があります。参加していただいた方の中には「文芸教育」を定期的に購入してくださる先生も出てきています。間違いなく、深い教材研究に基づく学びは参加者をひきつけ、「また参加したい」「もう一度こちらがこのような教材研究を踏まえて授業をしてみたい」「楽しかった」という意見をいただいています。西郷先生がカバン一つ、下駄ばきで私達の地域に足を運び、文芸理論を語っていただいたように、一緒に教材と向かい合い、学びあうことで文芸研の目指す「ものの見方・考え方」の理解が

深まるということを実感しています。何より忙しい中、参加していただいた先生方が満足していらつしやるお顔を拝見することにやりがいを感じています。本当に毎回、素晴らしいレジメを送付し、講座を開いていただいている上西先生には感謝の思いでいっぱいですが、これからはリモート学習会も視野に、さらに多くの先生方と一緒に学べる場を提供していきたいと願っています。まず、八王子市内ですして多摩地区で多くの仲間を増やしていきたいです。

そして、さらに野望は「中学・高校部会」の充実です。毎回、全国大会でも参加者が少なく、山中先生や上西先生の名前が（つまりいわゆる桜として）書かれている分科会です。実践を報告していただいていた石野先生、小村先生が現役を退かれ、全国大会のレポーターを探すのが困難な状況になっております。中学の教員としては残念でたまりません。

なぜなら、私は子育てや嫁姑同居の問題、介護と家の事情に追われ、細く長いだけの文芸研サークル員ですが、もし文芸研とであっていなかったらと考えたら本当にゾツとするからです。例えて言うならば、武器を持たずに素手で戦うようなものだからです。数学のような公式・理科の法則にあたるものは国語では何でしょうか。感性・勘に頼るだけでは生徒は納得しません。国語を読み解く、物語文でも説

明文でも普遍的な、誰でもが、「なるほど面白い。そう読めば、見えてくる」というものを提示して初めて生徒は「ものの見方・考え方」が育つてくるのではないのでしょうか。「ものの見方・考え方」がわかると自分で読める・わかる体験ができ、深い学びにつながるのです。「文芸研ニュース」で、サークル員の皆様にわかりきったことを書いているとふと我に返り思い至りましたが、小学校の豊かな実践を見るにつけ、少しでも灯りをともしていく使命が我々文芸研を学ぶ者にはあるのだと実感しています。私もこの三月でいつの間にか定年を迎える年になりましたが、まだまだやりたいことがあると身体の許す限り教壇に立つていきたいと思っています。

高い志をもつ石野先生を中心とする先生方が、ラインを通して「中学部会」を立ち上げ、オンラインの勉強会を進めています。地域のサークル活動の活性化と共にこのような取り組みも大切だと思います。

とりとめもないことを書いてきましたが、東京BMSへオンライン参加ができること、千葉・枚方のサークルへも希望すれば参加させていただけること、幸せな環境だと感謝しております。夏の全国大会に向けて、そしてコロナ終息後の活動に向けて、知恵を出し合い、そして地道な積み重ねを大切にしな



がら、活動が続けていきたいと願っています。

## 二〇二〇年度の六年生と、

### 担任としての思い

相模サークル 倉富寿史

昨年の六月の文芸研ニュース115号では、『長期休校になった時のこと』や『学校が再開した時の様子』などについて、私学の視点で書かせていただきました。今回は、六年生を担任していたこともあり、コロナ禍の中、最後の一年間を過ごす子どもたちの様子や個人的な思いについて報告したいと思います。

六月に学校生活がようやくスタートし、夏が過ぎ、十月でひとまず前期が終わりました。本来なら、伝統的な関西旅行や、六年生が主役になる運動会や七夕学芸会や文化祭を経験し、精神的にも一回り大きくなっているはずでした。加えて例年だったら六年生が下級生たちのお世話をしながら交流する機会があったのですが、それもできなくなってしまったので、そういう活動を通して成長するチャンスもなくなっていました。

でも、そんな状況の中でも六年生たちは（仕方ない、という思考が定着してしまったのだと思います）日々の生活から楽しさを見つけ出し、友だちとも仲良く過ごし、冬に向かって健気に過ごしていました。学校としても何かできないかと知恵を絞り、縮小版の運動会や文化祭を実施しました。ただ、本校は全員が中学受験に挑む学校なので、そのストレスは例年よりも増していたはずです。不安の中で勉強に励まなければいけない毎日、さぞかし大変だったと思います。担任としても、過度な不安や不満を抱えていないか気をつけて見ていかなければいけませんでしたし、実際のところ、それが明らかな原因となつて行動が変容してしまう子もいました。

そんな状態で十一月が過ぎ、ようやく年末になつたと思つたら感染がものすごく拡大してしまったので、二月の受験まで秒読みとなつた一月は学校を休む子が例年よりも多く、それはそれで仕方ないことだと思いつながら、担任として受験対応の業務をこなしていました。一方で、二月下旬に行く一泊二日の卒業旅行（二日目はデイズニールランド！）は行けるのか？卒業式は昨年度のように六年生と保護者と教員だけが参加することになるのか？など、気がかりな点はなくなりませんでした。結局、緊急事態宣言は延長となつてしまいましたが、卒業旅行は宿泊

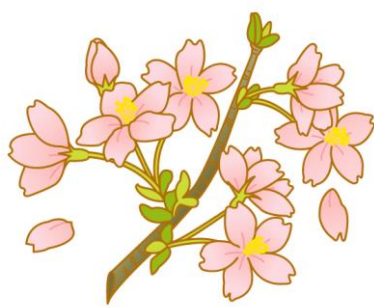
を諦めてバスを倍の台数に増やして「日帰り二日旅行」にし、しかも行き先は一日目がデイズニード、二日目がデイズニードへ行くことにしました。（実は、冬の感染拡大の可能性を予測していたので、六年生へのせめてものご褒美と考え、七月の頃にはその二ヶ所を予約していました。）

二月の受験が一通り終わり、いよいよ卒業旅行の日を迎えました。入場規制のために十時入場、五千人程度しか入れない、という条件付きでしたが、予約したのがとても早かったので、学校関係の団体は自分たちぐらいいいかいなく、加えて通常ならばどのアトラクションも六十分待ちや百二十分待ちになるはずだけど、列に並んでも五十分ぐらいですぐに乗れてしまうほど空いていたので、子どもたちはいろんなアトラクションにどんどん乗ることができました。自分も、大人気の〈ソアリン〉（今までの最長待ち時間は六時間らしいです）や新アトラクションの〈美女と野獣〉などに乗ることができました。二〇二〇年はずっとお楽しみがなかったもので、六年生は大きな思い出をつくることができ、その楽しんでいる様子を間近で見ることができたので、担任としてホッとすることができました。

二月下旬は、そんな楽しみも味わいながら卒業式に向けた練習も始まっていきました。本校の卒業式

は一〇五年生の全員が式に参加するのが伝統なのですが、さすがに密になってしまっているので、在校児童代表として五年生だけが参加し、声を出す「呼びかけ」も形態を変えて行い、無事に式が終わった時は、今まで味わったことのない安堵感と達成感で胸がいっぱいになりました。

二〇二〇年度が終わり、今は次の年度に向けた準備が始まっています。教員同士でも「コロナ禍の中での学校教育」について、さらに話し合わなければいけないと思っています。多くの迷いや悩みはなくなりそうありません。でも、どのように計画したら子どもたちが有意義に過ごせるのか？何を精選すべきか？など、今まで当たり前に行ってきた伝統的な活動を見直す良い機会だととらえ、一步一步前進していくしかないと思っています。



## 休校から一年が過ぎて

大阪・豊中サークル 朝輝千明

コロナの休校から一年がすぎ、教室の子どもたちの姿はあまり変化を感じられず日常を過ごしているように見えていました。

ですが、私の学校でも冬ごろから虐待・不登校の数が昨年度に比べ急激に増え、他機関にお世話になる子どもたちが何人もいます。それがコロナと関係あるかと言われればわかりません。もともとどの家庭環境・発達の問題からだと思われ、その根っこは数年前からあったことはわかっています。ただ何件も続けて、それがこのコロナ禍で表出してきたのは、何か関係があるかもしれません。これは本校だけではなく、全国でも見られる現象ではないでしょうか。

抱えているしんどさが隠れているより、表出した方が解決の糸口が見えるので一概に問題の数が増えることがダメだとは私は思いません。これをきつかけに、今まで子どもも親御さんも悩んでいたことを表に出し一緒にどうにかできればと長期目線で考えていきたいです。

学校だけでは対応しきれない案件が何件もあり、子ども家庭センターの職員さんも「今年は今までノ

ーマークだった子の虐待などが爆発的に増えている」とのことです。

目の前のことだけにとらわれず、文芸研で学んでいる「ものの見方・考え方」を実生活にも意識して取り入れ、子どもたちと関わりたいと思います。

## 野澤先生を講師に、校内自主研修会

枚方サークル 安川勝道

大阪市住之江区の住吉川小学校というところに勤めています。

勤務校では、昨年度から、研究教科が国語となりました。「文芸研」のことを知ってもらえる絶好の機会なのでは、と思い、学年主任に相談してみました。「文芸研」というものがあること、国語の事を深く学べる事、めっちゃくわしい野澤先生という方が無償で講師を引き受けてくれること、等々伝えると、興味を持ってくれました。それで学年会で教材研究会を開くことになり、ZOOMで野澤先生を講師に教材研究のためのZOOM自主学習会を持つことになりました。

6年団だったため、6年生の「イースター島には

なぜ森林がないのか」の教材研究会から始めました。その際、興味を持ってくれそうな若い先生にも声をかけて、5、6人くらいとなりました。

その後も、野澤先生に「ZOOM」学習会を持ってもらうことができました。② 8月・2年「ビーバーの大事」③ 10月・6年「海の命」④ 11月・2年「かさこじぞう」⑤ 1月・4年「世界一美しいぼくの村」⑥ 2月・2年「あなのやくわり」⑦ 2月・2年「ニャーゴ」⑧ 3月「人間認識と表現の力を育てる詩の授業」と、計8回、昨年度行いました。参加してくれている人も、「忙しいけど行けたら」から、「何とか時間作って！」という風に意欲も段違いになりました！これも野澤先生のお力！

今年度も4月30日に6年「風切るつばさ」を有志で実施しました。「ZOOM」ならではの、他校の二人も参加でき、計7人で実施しました。去年講師で岡山に行った若手も「参加したかった」と悔やんでいました。

国語を実践する楽しさを実感する野澤先生ファンは少しずつ、着実に増えています。今年も、野澤先生、よろしく願います。

#### これまでの参加者の感想や反応

安川「野澤先生のお話はさまざまな含蓄を含んで、もちろん教材のポイントも、なぜそこが大事なのか、

どう大切なのか、とても分かりやすく、聞いていてとても楽しいです！教材の背景や経緯など普通なら分からないことがたくさん出てきて、本当に面白いです！こういう授業を受けたかったといつも思います」

梅垣さん（6年）「この立場になって、あんな風に講義してもらえることが少なくなり、とても有り難かったです！特にいま授業でやってる单元なので、本当になるほどと思うことがあって、勉強になりました！あんまりしつかり意見言えませんでした！が色々な考え方があって、国語ってやっぱりおもしろいなぁって改めて思いました！物語文ってこんなに楽しく想像したり考えたりできるんだと思いました！」

木田さん（6年）「今日とても授業で発問しやすくなって、昨日のお話がとても役に立ちました」

角間さん（担外）「物語や文芸の基本的な知識が学べてよかったです。物語文を指導する時に、どのように声かけしたらいいかや、どこに重点を置いたらいいかというのわかり勉強になりました。どんな答えならいいのかも、実際参加している人たちの受

け答えを基にアドバイスがもらえたので参考になりました。ただ、あの授業を実際に子どもたちにしようと思ったら、積み重ねが大事だろうと思うので、どこまで実現できるのか、自分の力量も含め難しそうですねと感じました」

神牧さん（5年）「題名読み、作文につながる指導、読者が読みたくなる作文指導等、とても大切な事いつも教えてもらって、ハッします。また、一つずつ場面ごとに、様子をとらえたり、「自分だったら」と内の目でイメージしたり、その際文中の言葉を選びながら根拠を明確にして、意見を出していくのがとても刺激になります。その時、どんな意見でも否定されないスタンスがとてもステキで安心して意見を言えます。その後の、答えた後の深める続けさまの発問にも、聴き方広げ方がとても参考になります。その発問によって世界観が広がり深まり、授業を受けて楽しかったです。そんな授業ができるように頑張ります」

森田さん（担外）「一つの作品を深く読む事の楽しさを知りました。また、自分以外の人と意見を交流することにより、自分が言いたくても言葉にならなかった気持ちを誰かが同じ考えで伝えてくれたり、

人の意見を聞いて『なるほど、そんな読み方もできるか』と、また違った見方を学ぶことができました。こうやって子ども達も、他人の見方・考え方を学ぶ授業ができれば、楽しく学べると思いました」

岡崎さん（昨年度2年・現特別支援）「私は今まで、国語が面白いと思ったことがありませんでした。でも、文芸研に出会って、野澤先生のお話を何度も聞いていくうちに、どうやって授業を進めていくのか、授業者は子どもに何を投げかけて、授業を進めていくのか、が、少しずつわかるようになってきました。そうすると、国語（特に物語文）が好きになっていきました。初めは、どうやって授業を進めていくべきか全くわからず、授業の流れを教えてもらえるなら、という気持ちで参加していました。でも、変わりました。今では文芸研の一文一文に対して、深く考え、自分の考えを持って文章に向き合っていくやり方に、面白さ・素晴らしさを感じています。そして、去年2年生の担任として、文芸研で学んだ見方・考え方で『かさこじぞう』を実践しました。内の目・外の目という言葉を子どもに説明し、理解させて進めていきました。初めは、いつも手を挙げる児童だけが発表をしていました。ですが、時間をかけて人物像に寄り添って授業を進めていくうちに、想いを発表

する児童が増えていき、黒板が児童の考えで書ききれなくなるほど、いっぱいになりました。休み時間にその黒板を見た時、感無量でした。国語でここまでの授業が『私にもできた！楽しかった！またやりたい！』とおもえたのは初めてでした。じいさまばあさまの優しさを子どもたちも感じて、クラスがより一層、優しさに包まれたように感じました。2年生の学年末のふりかえりシートには、『内の目と外の目という言葉をはじめ知った』と書く児童もいました。私は、子どもたちと素人ながらも、文芸研の授業をさせてもらえて幸せだったと思います。文芸研の授業は、子ども一人一人の素直な考えを尊重し、思いを言葉にして、自分と向き合える素晴らしい授業です。そして、そこから、自己肯定感や、自信が生まれます。私も、文芸研を通して、授業に自信がつかました。本当に感謝です。これからもたくさん勉強させてください！よろしくお願いします！



## 広島から・・・

広島文芸研・広島サークル

砂島 祐子

2021年になっても、コロナ禍は収まるどころか変異ウイルスも現れて日々の感染者は増え、不安で不自由な毎日をおくらなければなりません。いつたいいつまでこの状況が続くのでしょうか。

この為、今まで4月・9月に行っていた「先生の国語教室」を昨年は中止せざるをえませんでした。

昨年度から、広島市の小学校は、国語の教科書が東京書籍から光村図書に変わり、新しい教材を学習したいという人は多いだろうとその準備を進めていた矢先に全国一斉休校。「国語教室」開催は無理だろうと断念しました。

その後、「国語教室」どころか広島サークルで集まることもままならず、メールが主な連絡手段でしたが、今年に入り、ズームでサークルの例会を行うことができました。

4月、広島は感染が少し収まっているので、久し

ぶりに対面のサークルの例会を行いました。そこで、5月の例会は、集まれる人とズームで参加する人とで学習会をしようということになりました。

「国語教室」も行ってみようということになり、6月の第一土曜日午後には計画しています。

全年はできないので、13…30から1年「おおきなかぶ」、14…45から2年「スイミー」の二つの教材を予定しています。

会場が狭いので、来てもらえる人は数人に限定されますが、その他の人はズームでの参加となります。

各学校に1枚、「国語教室」のチラシの配布を組合にお願いしていますが、どのくらいの参加があるかわかりません。また、ズームを使つての「国語教室」は初めてなので、話し方や進め方など不安があります。しかし、まあとにかくやってみよう、前へ一歩でも進めるために、と、新しいことに挑戦することになりました。

ところで、私は今、ステイホーム状態なのですが、広島も先生の数が足りないようで、教育委員会に臨採の登録もしていないのに、時々、「〇〇小学校へ行つてもらえませんか」という電話が教育委員会からかかってきます。コロナ感染が怖いので、と断つ

ていたのですが、とても困っている様子なので、とうとう約二週間引き受けました。

やっぱり仕事は面白いのでこれからもやってみたいという気持ちはあるのですが、臨採の場合、異動内容を示す「辞令書」が出るのがとても遅く、半月後くらいに学校に送られてくるようです（1か月くらいかかるということ聞いたことも・）その為、仕事を辞めた後の健康保険証の手続きができず、本当に困りました。

以前、臨採の先生に健康保険証についても大変なんだということは何度も聞いていたのですが確かにこれは本当に困る！（この点について、教育委員会の人に話したり、組合にも改善要求をしてもらうようお願いしたりしました。少しでも早くいい方向に向かうとよいですが）

教育現場が魅力的な働き場所であり、安心して働ける場所であるようにと思います。

2021.4.24記

## 来るべき全国大会に向けて

山口東サークル 清田和幸

日本の各地でコロナウイルスの感染が、まだまだ止みそうにありません。2年連続での山口大会の延期は残念ですが、今年の文芸研・全国大会が完全オンラインになったのは英断だったと思っています。

いつもなら全国大会が近づけば、県内の各地でプレ集会を行うところですが、昨年はプレ集会を1回も行えませんでした。他の民間教育団体では、オンラインとリアル参加を併用した「ハイブリッド」方式で大会を行うところもあるようですが、文芸研ではハイブリッド方式の大会は、設備面でも要員面でも、まだまだ難しいように思います。

山口東サークルでは、オンラインでの学習会やハイブリッド方式での学習会の可能性を求めて、2月のサークル学習会、4月の外部向けの学習会（プレ集会）をZoomを使って、ハイブリッド方式で開催してみました。

2月のサークルも、4月のプレ集会も、どちらもはじめに全体会を行い、後半は分科会（2か所）に分かれて行いました。特に4月の学習会では、東京の山中吾郎さんにオンラインで参加してもらい、「学

年初めの国語授業のポイント」について、講義してもらいました。

実際にハイブリッド方式の学習会を開催してみても、いくつかわかったことがありましたので、ここで述べてみます。

○ハイブリッドはリアル参加のみや完全オンラインよりも難しい。

ハイブリッド方式は、東京サークルの学習会でもやられていますが、その際に必ず西さんがオンライン要員でサポートされているように、今までの要員（司会者、レポーター、受付）に加え、オンラインに対応できる要員が必要になります。従来の全国大会のように、いっぺんに10数個の分科会を開催する場合、その分科会と同じ数のオンライン要員が必要になるということです。

○リアル参加を希望される方、オンライン参加を希望される方、それぞれいる。

ハイブリッド方式で学習会を行ってみて実感することは、リアル参加の学習会を渴望している方がいらつしやるということです。以前、山中吾郎さんが山口におられる頃から、宇部市で定期的に学習会を開いておられました。その学習会に参加しておられ



た方々が、今回のプレ集会に参加されました。その方々は、皆、山中さんの話や文芸研の話に聞き入っておられ、次回の学習会もぜひ参加したいと言ってくださいました。皆さん、zoomなどを使つての学習には抵抗があるのだと思います。

ですが、きっと全国規模で考えた場合、移動や宿泊のいらないオンラインでの学習参加を希望する方もいらつしやると思います。今は、その両方のニーズに応える時代になっているように思われます。

※山口では、今年の完全オンライン大会も、zoomに抵抗のある方を集めて、できればスポーツの大会をみんなで見るような「パブリックビューイング」のような形ができないか、今思案しているところです。

### ○その他の問題点

その他にも、様々な問題点や課題もわかりました。

・さまざまな機材が必要。

zoomというところ、パソコンやアイパッドがあればなんとかなるかと思つていましたが、離れた者同士がスムーズに会話を行う場合、声が聞こえにくいとか、話している人やホワイトボードの文字が見えにくいといった、細かな問題が出てきます。その際は、やっぱり web カメラや音はつきり聞こえるスピーカ

ーが、分科会の数分、必要になります。

・教材の著作権について

以前から、教材文の著作権については何度も指摘されています。今回の学習会では、リアル参加の方には会場で教材文のコピーを配付し、オンライン参加の方にはご自分で用意してもらいました。オンライン参加の方へのレジメ配付は、メールにて行いました。

・学習会への申し込み方法

今回の学習会への参加申し込みですが、オンライン参加の方については東京の学習会に倣つて、「Peatix」というイベントの予約管理システムを使いました。Peatixを使うと、参加者の管理が行いやすいこと、メッセージ機能を使つて参加者とのやり取りが比較的スムーズにおこなえること、さらに、参加費のやりとりを私たちが直接行わないで済むという利点があります。ただ、オンラインの方には事前に資料の配付を行う必要があるのですが、直前での申し込みはお断りしました。（今回は、直前で申し込みはありませんでした。）

リアル参加の方は、会場でやり取りができるので、当日参加もOKでした。

Peatix は便利ですが、ハイブリッド方式の場合、オンライン参加とリアル参加の参加費をどうするか

（同額か、差をつけるか？）とか、オンラインの方がやむを得ず参加できなかった場合の参加費をどうするかなど、これから考えていかなくはなりません。

今回、ハイブリッド方式で学習会をやってみて、様々なことが見えてきました。一番分かったことは、私たち山口東サークルの力量がまだまだ足りないということです。

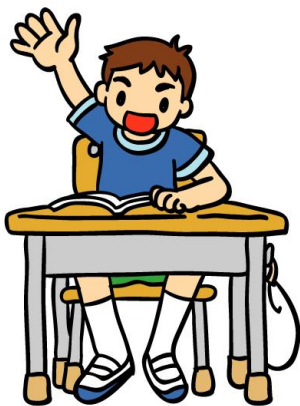
今回の学習会に、サークル員は真剣に取り組む、レポーターは学年末・学年初めの忙しい中、時間をやりくりしてレポートを作成し、他のサークル員も会場の予約、オンライン機材の準備、学習会の宣伝活動など、一生懸命に動いてくれました。ですが、レポートの説明も含めた分科会の運営、また、全体会の運営など、文芸研の理論を使った国語授業の魅力を十分に伝えきれたかというと、疑問符がつきます。また、全国大会を行うためには、参加者はまだまだ足りません。

今回試験的に行ったハイブリット方式の学習会ですが、いつか開催されるであろう山口大会にむけて、サークル自体の課題もはっきりしたように思います。これは開催したからこそ見えてきたことです。また、宇部からの参加者の方が示してくださったように、

文芸研に学習を求めている方は、山口の地にも必ずいらつしやることを再認識できました。

先日、山口文芸研の大先輩、林道彦さんに全国大会が再延期になったことと、今年度はオンラインでの大会開催になったことを報告した折、林さんが今も、老人会や地域の活動等で精力的に動いておられること、その際に、文芸理論で話をする皆さん（特に学者の方々）の評判がよいこと、私たち現役世代の活動を嶋村伸矢さんとも喜び合っておられることなどを、教えていただきました。

多くの先輩方がこの山口で紡いできてくださった文芸研の灯を、全国大会という大きな光明に広げていくため、これからも山口東サークルは団結して、前進していきます。



# 唐津国語の教室

唐津サークル 川口 芹奈

唐津文芸研サークルは、月に一回集まり学習を続けています。また、福岡サークルにも参加させていただき、文芸について学んでいます。

2月に、「唐津国語の教室」を開き参加者の皆さんとともに学ぶことができました。唐津サークル員は現地に集まり、オンラインと合わせたハイブリット型での学習会でした。オンライン開催では、様々な地域からも参加していただき、ご意見を聞かせていただいたことで、たくさん学びがありました。

講師の野澤先生からは、「スーホの白い馬」「初雪のふる日」の提案をしていただき、参加者がみんなで意見を出し合いながら、教材について様々な角度からの意見交換ができました。また、野澤先生からは、作品の知らなかった知識を教えてください、作品について知ることの大切さも学ぶことができました。

私は、初めて教材分析の提案をさせていただきました。1年生教材で「ずうっと、ずっと、だいすきだよ」の指導案を書きました。教材に真剣に向き合い、教材分析をすることで、教材の良さや豊かさを

学ぶことができました。そして、いざ、自分が書いてみると、自分の思いを言葉で表現することは難しかったです。さらに、それをどう子ども達に順序だてて授業を構成し学ばせるというかがこんなにも難しいことだと実感しました。今回の提案に向けては、2週間という短い期間で、わからないことも多く、唐津サークルで何度も集まって検討を繰り返しました。自分の授業が見えるまで検討した結果、実際の授業では子どもたちの発言を広げることができ、子どもたちの考えを聞き授業と一緒に作ることがとても楽しくなりました。「ずうっと、ずっと、大すきだよ」の最後の「なにをかつても、まいばん、きつといてやるんだ。『ずうっと、ずっと、大すきだよ。』って。」の一文は、誰に向けていったことなのか、私も何度も考えたところです。ここは、意見が分かれてとても面白く、前半からの解釈の繋がり等、とても興味深くたくさんのご意見を聞かせていただきました。どの考えもなるほどと思うことばかりで、たくさんの方の意見があることの素晴らしいさを感じました。

野澤先生をはじめ、参加いただいた皆様のおかげで学ぶことの楽しさを改めて感じることができました。ありがとうございました。

## 鹿児島より

かごしま文芸研 佐多巖

全国の文芸研の皆様、こんにちは。かごしま文芸研です。今回は、私たちが制作した「かごしまふさとカルタ」のその後についてのレポートをします。2014年（7年前）に制作、販売を始めた「かごしまふさとカルタ」。更に普及して、子どもたちの身近に鹿児島弁とカルタ遊びの楽しさを感じてもらおう！とサークルメンバーが、児童クラブや学校、児童擁護施設などを回って遊び方や楽しさを伝えていました。夏には指宿と霧島で大会も行い、活発にカルタ普及ができていたし、知名度もあがったと思います。

が、コロナ禍で活動が制限され、去年は難の活動もできなくなっていました。そこで、カルタの楽しみ方や対戦方法を紹介したビデオを制作し、行かなくても遊び方がわかるようにしようということになり、今回集まってビデオを制作しました。

2月も終わる頃、第一幼児教育短大の学生さんにも協力をお願い、半日かけてビデオ撮影を行いました。カメラマンの指示に従い、林先生が作ってくれた脚本をもとに、緊張の中少しずつ撮影が進みまし

た。

今、編集作業が進み、あとちょっとで完成です。撮影の時はどうかあ、と不安も大きかったですが、できたものを見ると、さすがプロ。なかなかの出来栄です。完成しましたら、YouTubeにも動画をアップする予定です。皆様もぜひご覧ください。

新年度が始まり、今年も第3土曜日にサークルを行う予定になっています。集まるのが難しい昨今ですが、仲間と共に地道に教材や文芸に取り組んでいきたいと思っています。



## 事務局通信

★また、新たな年度が始まって一月が立とうとしています。この間、またコロナウイルス拡大によって各地でご苦労されていると思います。そんな中でも、積極的な提案を頂いたり、学習会の組織をしたり、オンラインに挑戦する報をお聞きし、すごく心強く思います。

様々な対応、会議などで業務改善といいながら、時間が奪われていく現状もありますが、学び続けることが戦いの一つでもあります。同僚、サークルなどと手を取りあい、学びを続けていきたいと思えます。

今回は、文芸研始まって以来のオンライン大会を決定しました。大会事務局を立ち上げ少しずつ進めています。初めてのことも多く、皆様のお力をたくさんお借りすると思います。夏大会成功を足掛かりに、オンラインでの全国学習の展開を始め、今後の新たな運動につなげていきたいと思えます。大変なことも多いですが、成功に向けてご協力よろしくお願ひします。

★文芸教育、授業シリーズについての呼びかけ・販売をお願ひします。学習会が組織しにくい中ですが、

サークルでの学習や学校の同僚への紹介など、工夫して広げていきましょう。文芸教育については、山中吾郎さん、西真由子さんの紹介もありました。皆さんの紹介、手売りをしていくことが大切です。ぜひ一冊でも多く人の手に渡していきましょう。書籍紹介、学習会が運動の柱になります。ぜひ、サークルでのご検討をお願いします。

★サークル会費納入お願ひ。新年度になりました。サークル会費の納入をお願いします。一般会員4000円参事会員2000円となっております。よろしくお願ひします。

今後の予定（予定がくわしく決まりましたら随時連絡します。）

5月以降 全国大会に向けての、オンライン学習会（提案者、司会者、ズーム操作者など）

代表者会議にて

7月31日（土）

オンライン全国委員会、代表者会議

分科会打ち合わせ

8月1日（日） 第55回文芸研オンライン大会

12月26日・27日 冬の実践研（まだ未定です。）